

気持ちが見えた

県内のある小学校で、入学した1年生が学校探検の学習をしました。その案内役をするために、6年生が準備をしました。

「その言葉、難しくてわからへんで。」

「ルールがあるところは、くわしく教えてあげないと後で1年生が困るよ。」

「1年生のペースでゆっくりと歩かんとあかんな。」

これはその時の話し合いの一部です。

学校探検の当日、よく見ると話し合いにはなかった6年生の姿があちこちに見られました。ある子は1年生の目線に合わせてかがみ込んで説明していました。またある子は1年生の気持ちをやわらげようと笑顔で手遊びを教えていました。

そんな中に、ふだんは口数が少なく、恥ずかしがりで、「うまく案内役ができるか不安でたまらない。」と3日前の日記に書いていたAさんの姿がありました。そのAさんが、身振り手振りを交え、時々立ち止まり、大きく口を開け、顔を赤らめながらも生き生きと1年生に話しているのです。

Aさんは学習後の感想に、次のように書きました。

「1年生の時、学校には不思議な物がたくさんあると思いました。1年生のしぐさを見て今の1年生もきっとそう思っていると思いました。その気持ちがすごく見えたから、少しでも不思議な物をわかってほしかったから、できるだけゆっくり、やさしく、わかりやすく思っていました。いっしょに歩いていた1年生が、うん、うんとうなずいてくれて、わかってくれたような気がして、とてもうれしかったです。」

同じ目線に立ち、相手の気持ちをわかろうとしたAさんの気持ちは、きっと1年生に伝わったにちがいありません。親として、子どもの気持ちを受け止められているかどうかをふり返る時、子どもと同じ目線に立てているかどうか、大切な視点の一つではないでしょうか。